なごやごぼう
nagoya gobou

名古屋御坊

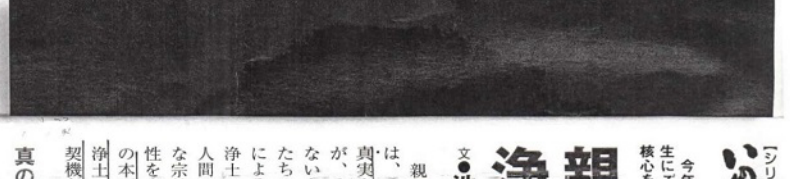
12 2008

発行所 宗教法人 真宗大谷派名古屋別院
代表者 小笠原倡昭
〒460-0016
名古屋市中区橘2-8-55
tel.(052)321-9201
fax.(052)321-3184
●東別院ホームページ「お東ネット」
http://www.ohigashi.net/

●購読料(送料共)一部150円・1ヶ年1500円 郵便振替00800-7-55104

主なニュース

子ども自然教室 "やきもの体験"報告 2
報恩講特集 4
「歎異抄」に学ぶ 5
報恩講案内 8



[シリーズ] いのちの尊厳 No. 231

今年度の名古屋別院報恩講の宗祖親鸞聖人讃仰講演会で講師を勤める池田勇諦先生にご執筆いただきました。親鸞聖人が浄土の真宗として開顕された、その教えの核心を尋ねてまいります。講演会と合わせご味読ください。

親鸞聖人の願われた浄土を聞こう

文●池田勇諦 Yuutai Ikeda

親鸞聖人の開顕された浄土真宗は、その名のごとく往生浄土という真実を人生の宗とする道である。だが、その浄土が今日もっともわからないものとなっている。そこには私たちの体質的なアニミズム（有霊観）による浄土の他界視、往生の転生視、浄土の死後視が……。思えばそれは人間の極めてプリミティブ（原始的）な宗教心にちがいないが、その無明性を自覚的に突き抜けて、万人成仏の本願の仏道を開顕した親鸞聖人の浄土の教えの前には、回人の否定的契機となるほかはない。

真の居場所を開く本願

では、浄土は現世なのか、否。浄土は私たちのうえに現世とか、来世とかという自我の分別心を打ち破って、真に去・来・現を超えて貫く真実の現在として現働する国土である。その点、聖人の浄土理解の基本語が「報土」であることに如実である。「大悲の誓願に酬報するがゆえに、真の報仏土と曰うなり」（『真宗聖典』三〇〇頁）と。つまり如来の本願は私たちのうえに国土として自己を表現する。それは形なき本願の形化として、願心を私たちに報らせる「無上の方便」にほかならない。ならば、いかなる願心か。国土を喪失して生きる私たちのために、真の国土、居場所と成ろうという悲心でないか。それが「光寿無量」の願心として、どこでも照らすはここに極まり、いつでも寄り添うはいまを離れない。

いまが一番いい時／いまが一番大事な時／ここが一番いい処／ここが一番大事な処

この真実のいま・ここの見開きこそ、本願が私たちに真の居場所として働く事実ではないか。本願は私たちに信心の自覚をもって仏道に立たしめ（回向成就）、同時にそこに仏の国土を開く（誓願酬報）仏力である。

永遠のいのち観に立つ

往生の本質的意義が「化生」と説かれることは、往生が場所的移転でなく、質的に主体の転換を指す。したがって真実信心の主体を賜る（回心）ところに往生浄土の大道に立ち、そこに始まる住正定聚の往生の歩みの極まり、成仏を「臨終一念の夕、大般涅槃を超証す」（『真宗聖典』二五〇頁）と言いきる。それは「すなわち穢身すてはてて、法性常楽証せしむ」（『真宗聖典』四九六頁）、この身の依って立つ法性にかえらしめられる永遠のいのちであることを告げている。

親鸞聖人の願われた浄土は、どこかに思い画かれた世界でなかった。どこまでも如来の本願名号による万人救済の仏事をなす、この身にはたらく国土であった。浄土が「帰依」すべき依り処であり、破闇満願の智慧の「光明」であり、教え導く「導師」であり、この世ならざる永遠のまことと「彼岸」であると説かれる所以であった。ゆえに浄土は私たちにとって「其の名号を聞く」ほかに出遇う方途はない。すでに善導も「自ら今身に浄土を聞くことを慶ぶ」（『般舟讃』）と、聞によってこの身にはたらく浄土との出遇いの慶喜を詠う。

ここに私は、いまこそ親鸞聖人以前の浄土の観念を自覚的に超えて、〝聖人の願われた浄土を聞こう〟と切に提起いたしたい。現代をよく生・死する活力に気づこう。

いけだ ゆうたい
同朋大学名誉教授

1934年生まれ。現在、同朋大学名誉教授。真宗大谷派講師。三重教区・西恩寺前住職。著書に『真実證文類述要』『御文動化録』などがある。

宗祖親鸞聖人讃仰講演会

講題●「親鸞聖人の願われた浄土を聞こう」
講師●池田勇諦氏
日時●12月16日（火）午後4時～
会場●名古屋別院対面所
◎聴講無料